OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	泉大津市における「防災まちあるき」：宗教者と行政連携をはかったアクションリサーチ
Author(s)	佐々木, 美和; 稲場, 圭信
Citation	宗教と社会貢献. 2017, 7(1), p. 19-34
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60618
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

泉大津市における「防災まちあるき」
―宗教者と行政連携をはかったアクションリサーチ―

佐々木美和[*]、稲場圭信[†]

Town Walk at Izumi-Otsu City as a Disaster Prevention
Action research aiming the cooperation with faith-related people and the local government

SASAKI Miwa, INABA Keishin

1. 宗教者と災害、防災への取り組み

東日本大震災以降、宗教と行政との関係が変化した。首都直下型地震、東海地震、南海トラフ大地震などに備えた動きがある中で、宗教者と行政との協力的な体制が生まれている［稲場 2016: 155］。東日本大震災では、指定避難所以外の 100 を超える多くの宗教施設が避難所となった。さらに、宗教施設と行政との防災協定が結ばれているところも、全国に多数ある。これらの情報は、一般の情報誌、朝日新聞や防災情報新聞など多くのメディアが取り上げた。また宗教施設が避難所となったという同様のことは熊本地震でも起こっている。2016 年 12 月 5 日、熊本大学で「被災地における人びとのケア～宗教者の役割とその連携の可能性」と題されたシンポジウムが開かれ報告がなされた。シンポジウム中の一例では、熊本健軍ルーテル教会が指定避難所ではなかったにも関わらず避難所として会堂を始め教会を開いていたことが発表された。近所の人をはじめ、一般の避難所に居づらさを感じたあらゆる「マイノリティ（障がい者、外国人、性的マイノリティなど）」を受け入れた避難所になったことがうかがえた。

避難所として協力体制を組むだけでなく、「防災と言わない防災（渥美 2012）」を行う宗教者の例も見られてきている。東京のある地区では、宗派

[*] 人間科学研究科・博士前期課程 2 年・m.kuro-neko@hotmail.com
[†] 人間科学研究科・教授・k-inaba@hus.osaka-u.ac.jp

を超えて複数の教会が協力し、地域の市民と宗教者が連携し防災に動く姿がみられている。2016 年夏には、消防車が入るほど大きな土地を持っていた、とある外国人系の教会と、地域の消防署、地域の子ども、住人などを巻き込んだ動きが見られた。これは、「魅力的」な「防災と言わない防災」のうちの動きの一つと言える。そしてそのような防災はいざという災害時に役立つ社会貢献であろう。

今回はそのような「防災と言わない防災」の事例のひとつとしても取り上げられるであろう、泉大津市で行われた「防災まちあるき」について報告する(1)。

2. 泉大津市での防災まちあるきの実施まで

2.1 毛布の町泉大津市

泉大津市は大阪の中心部梅田よりもさらに南に位置する総人口 75,581 人（男性 : 36,260 人、女性 : 39,321 人）世帯数 : 33,721 世帯のまちである。「日本一の毛布のまち」と呼ばれ、日本で初めて毛布の生産がされた。その後も全国シェアは国内一である。市のキャラクターである「おづみん」も羊毛にちなんだ羊の妖精である（図 1）。また、同市は「セーフコミュニティ」として世界基準を満たしていることでも知られる。

図 1. 泉大津市のキャラクター「おづみん」

泉大津市には古い町並みが多く残っており、落ち着きのある深い茶色の肌をした木造の平屋が狭い路地に並ぶ様子は風情がある。まちを歩いていると寺院が多く散見できる地域であり、今回アクションリサーチをするにあたってキーパーソンとなった人物も住職であった。住職は「NPO 法人泉州てらこや」を担う代表でもある。毎年 11 月に同市で開催される「さんま祭り」においても住職は中心人物として実行委員会などにも参加し活躍してきている。このように普段から地域住民との関係もさることながら、市の議員など

ともつながりのある方である。

今回の防災まち歩きこのように地域コミュニティの中心人物である宗教者の住職が動いたからこそ成り立ったものであった。

2.2 事前ミーティング/ 地域フィールドワーク

防災まち歩きは、後述するように 2016 年 2 月 5 日に実施されたが、実施前に市の議員や住民、宗教者などを交えた事前ミーティングが開かれた。初の事前ミーティングの面々も、住職の地域で培ってきた関係性を軸にして集まった。

初回ミーティングは 9 月 5 日にもたれ、昼食を食べながらの打ち合わせのために筆者らは市役所前のカフェに集まった。このカフェの経営者も今回のミーティングに参加する。12 時も半ばを過ぎたころ、ミーティングのメンバーが揃い活発な打ち合わせの時が持たれた（写真 1)。アレンジした住職を含め寺院、神社、議員、自主防災組織、建築士、青年会議所、教育委員会、市役所など様々な方面からの連携が得られそうな顔ぶれとなった。筆者ら大阪大学の学生も合わせると総勢 10 名でテーブルを囲み、ときに笑いを交えながら熱い意見が交わされた。宗教者と行政、地域を巻き込んだ防災の取り組みについて、このミーティング後、12 月に泉大津市の市長となる南出氏の言葉からはメンバーの意欲が集積して伺えた。「泉大津市がロールモデルになりましょう」

（写真 1）事前ミーティングの様子

ミーティングの内容は、宗教と行政の連携についての経緯、防災まち歩きの際に使用する「災害救援マップ(http://www.respect.osaka-u.ac.jp/map/)」アプリについての説明と質疑応答、実際まち歩きの際に考えられるルートについてなどである。着々とまち歩きのプランがなされ話し合いがスムーズに進む中で、時折このような会話も見られた。メンバーの一人が「最初に（泉大津市内の）全部（の宗教施設）に声かけて…」と、すべての宗教施設との連携の段取りを話すと、宗教施設によって事情が異なるので可能な範囲で連携をはかることが肝要との声もあった。しかし全体としては各方面でやる気が見られ、唯一の懸念は各宗教間の連携かとも思われた。

15 時を過ぎるころ打ち合わせが終わると早速、ミーティング中で説明のあった「災救マップ」アプリを用い地域を見てまわった（写真 2, 3）。住職の案内と運転で地域の避難所、宗教施設を回る。

（写真 2）津波の際避難する行政からの指定場所には、
このようなマークがある

（写真 3）避難場所案内図

小雨が降る中であったが、住職は意に介さず熱心に車を走らせては止め、車から降り、説明を加えた。そうして 17 時前には市役所に到着、危機管理課と会い、市との連携をはかる打ち合わせが持たれた（写真 4）。

まず宗教と行政の連携について、東日本大震災以降の経緯や他地域での実際の事例などの説明があり、さらにアプリの紹介などと続いた。しかし、お互いに平行線のような話し合いが続く。いくら説明を重ねても、その場で回答が得られず、連携が生まれることがないように思われた。しかし後日、防災まち歩きの当日には、このとき話し合いに参加した危機管理課職員も連携して参加することとなる。

（写真 4）泉大津市役所での打ち合わせの様子。右は危機管理課職員

2.3 ワークショップ

初回の事前ミーティングが終わったのち、二回目の事前ミーティングが持たれる前に、筆者らのゼミの 90 分を使い、まち歩きの企画ワークショップが行われた。当日参加することとなる学生も 4 名いる中で、10 数名の学生が 3 グループに分けられた。事前のワークショップという準備の段階であったが、笑いが絶えずわきあいあいと進み、後述する「防災と言わない防災」「楽しい防災」としての要素があった。

色とりどりのマーカーと「えんたくん」（写真 5,6）を用い、ブレインストーミングの要領で紙に書き込んでいく楽しい作業である。話し終わったグループの内容は授業の最後でお互いに発表された。内容は以下の表 1 の通りである。

（写真 5）ワークショップに用いた「えんたくん」

（写真 6）まち歩きに向けたワークショップの様子

（表 1.） ゼミで話し合われたそれぞれのグループの内容概要

12 月 19 日ゼミ 泉大津防災街歩きイベント案メモ（まとめ）

事前に
地域の会報誌、回覧板などで声をかける
イベント情報を拡散　SNS など

オリエンテーション
アプリをダウンロード/ できない人には紙のマップ
(案 1) 出発前に、オズミン体操で体をほぐす
(案 2) 家族 5 人分の荷物をリュックで用意。持って歩けるか。持っての移動は大変。

出発
（案１）スタンプラリー
> 各スポットにひとつのキャラクターや漢字を置き、揃えて景品。
> 商店街では割引き券を用意できるか。地域やお店ならではの商品。
> 災救マップに施設の写真をアップロード。IP アドレスで確認
> 街を知る。泉大津の被害想定。3 択か 4 択など防災の知識クイズ、当てたら景品。
> 車いすで移動。バリアフリーの場所のチェック。ブロック塀など、危険度の確認。
> アプリに顔文字(^^)などで安全、大丈夫などの発信。

（案２）オズミンを使った町歩き
> オズミンも着ぐるみで町歩きに参加。
> オズミンシールを避難所の看板などに貼っておく。
> オズミンシールを撮った写真を、アプリにアップロード、何枚写真がそろったかで景品。
> 景品は備蓄品、缶詰、防災用具、市から毛布（泉大津の品）の提供はどうか。

（案３）炊き出しをまちあるきに組み込む
> 昼をまたぐことで、途中で訪れる神社、寺院などの炊出しに参加できる。
> 歩くときに、あえて、おにぎりの数を足りなくする。足りない数でどう分け合うか。

最後に
参加者にアンケート/ オズミンと記念写真

考慮点
> お年寄りなどの休む場はどうか。

このとき学生らによって話されたアイディアは、1 月 6 日の事前ミーティングにおいてシェアされた。

3. 防災まち歩き当日

2 度目の事前ミーティング（1 月 6 日）から一か月後の 2 月 5 日、防災まち歩きの当日を迎えた。泉大津市の公共スペース「テクスピア大阪」にて災救マップの講習会がまず室内でなされたあと、野外において防災まち歩きが実施された。実施後は昼をはさみ、参加者同士の交流が深まる中、予定を上回り午後 5 時を過ぎまで密度の濃い振り返りが持たれた。また当日の参加者としては、泉大津外から筆者ら大阪大学からの院生・教授、國學院大学、皇學館大学、関西学院大学の教授方や國學院、皇學館の学生、アプリ開発者ナブラ・ゼロ社社長、全国自治会活動支援ネットの役員、産経新聞記者、ラヂオ岸和田理事長、防災士会の大阪府事務局長などが集った。泉大津からも行政、議会、寺院、自主防災組織の有志方が参加した。

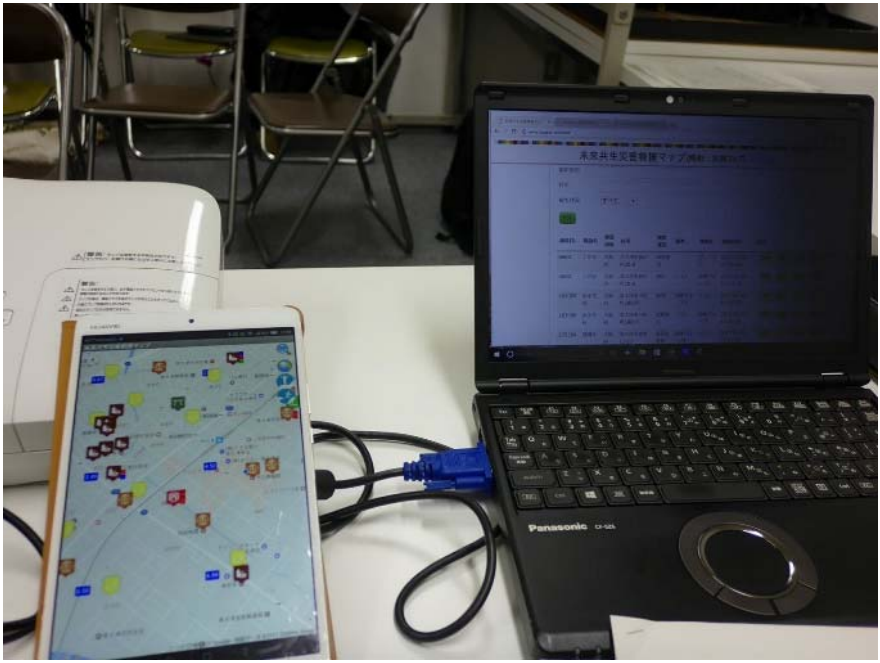
3.1 災救マップの講習

室内におけるアプリの使い方説明のあと、グループ分けをし、アプリを使った災害を想定したまち歩き実験がもたれた（概要は表 2)。参加者の大部分はまち歩き実践に歩く形で参加した。歩く側の参加者には、グループごとにそれぞれ行かなければならないスポットが課されており、アプリの機能を用いて、その施設の被災情報（被災状況投稿：電気・水道・ガス・通信の状況、避難者・乳児数・妊婦数・病人数・負傷者数・要介護者数等）を入力、スポットの写真を撮り発信する。本部はそれを見て、今どのグループがどこにいるのかがわかる（写真 7)。

（表 2)　防災まち歩きの概要

防災まち歩き実施要項
日時　平成 29 年 2 月 5 日（土）
１０：００　　スタッフ集合　　テクスピア大阪　４０３会議室
１０：３０　　参加者集合
グループ分け、災救マップ・アプリのインストール
１１：００　　まち歩き（現場実験）説明（プロジェクター使用）
１１：２０　　まち歩き（現場実験）スタート
（小雨決行。強雨の場合には室内で実施）
途中（弁当などの買い出しも OK）
１２：００　　昼食
１３：００　　午後受付（テクスピア大阪　３０１会議室）

本部に待機する側にも数名残り、何かあった際の連絡などを待機していた。また、それぞれのグループから発信される情報集約を見て、途中で「指令」などを出す機会をうかがった。



（写真 7）アプリの使用画面（左）と発信状況の確認画面（右）

このたびのキーパーソンであった住職も、本部の待機側に回っていたが、楽しんでいた様子が感想からもうかがえる。

> たった 1 時間、計 5 回だけの発信でもグループによって個性が出るんです。面白い！

住職の言う「計 5 回だけの発信」というのが、アプリの機能を用い、課されたスポットの写真を送ることである。また、楽しんでいたのは企画中心者だけではない。小雨が降っていたが、そのような中でも楽しんでいる様子が伺え（写真 8, 8, 10）、よい防災訓練の例となったことがわかる（4 節で詳述）。

（写真 8）あるグループの写真。小雨の中笑顔が見られる。

（写真 9）雨が降る中、「指令」の紙を確認しアプリに入力する参加者

（写真 10）笑顔が見られるまち歩きの様子。
事前の市役所との打ち合わせの際に話した職員も参加している。

まち歩きのあとや企画のあとで聞かれた地元参加者の声からも、午前中の防災まちあるきがよい時間であったことがうかがえる。

> 不謹慎と言われるかもしれませんが楽しく歩きました。又、途中から津波発生のため、海抜 4 メートル以上の安全な場所に避難せよとのミッションが課せられるなど、今までの防災訓練にはない、学びがありました。

3.2 まち歩きの振り返り

午後は午前のまち歩きの振り返り、泉大津の防災の取り組み紹介、伊勢市での WS の紹介、宗教の防災についての講演、最後は参加者から気づきや学びが発表された（午後の概要は表 3 の通り）。

（表 3）まち歩き午後の概要

１３：３０　　講習会開会
趣旨説明
まち歩き振り返り
泉大津の自主防災の取り組み
伊勢市の防災まち歩きの取り組み紹介
休憩
防災と宗教・協定・協力について
質疑応答・意見交換会
１６：３０　　閉会
１７：３０　　交流会

先述したとおり、今回のまちあるきでは、泉大津市外の参加者も多かった。振り返りの中ではそれらの市外の参加者から、泉大津市の風景を「風情がある」などの声が聞かれた。これを聞いた地元参加者がのちにこう言っている

> 泉大津市以外の方が、僕らが何となく見ていた泉大津の風景を貴重だとか素晴らしいって言ってもらえること多かったのが印象的。そういう視線、大切ですね。

防災まち歩きは、従来のバケツリレーや消火器の使用方法などをレクチャーされるような防災訓練とはひと味違った、まちを再発見する楽しさも盛り込まれたものとなったようだ。

4. 今後の展望

今回の防災まちあるきは、産経新聞（2017 年 2 月 25 日付け）でも取り上げられていたごとく、「避難場所までの看板が少ない」、「飲料水に転用できる消火用水の貯水槽を見つけた」、「改善すべき危険な場所があった」などのの意見もあり、まさに「散歩感覚」の防災訓練であった。参加者の中のある一人が次のように言っていたことは特筆すべきだろう「(防災が）こんなに

楽しくていいの？」

しかしそのような防災こそ、社会にとって役に立つ防災だということができる。というのも、「防災イツモノート」などの著者であり、この泉大津市の防災まち歩きのあとに実施された伊勢市における同様の防災まち歩き（2017 年 3 月 14 日実施）にも参加した、防災などに詳しい渥美(2013)によれば、「防災と言わない防災」のよい具体例のひとつに、今回のような楽しい防災が含まれているという。このような防災は、まず子供を巻き込みやすい。子供を巻き込みやすいということは、その親をも巻き込みやすいということである。それは、防災にもともと興味のない、逆説的に「最も防災訓練に参加してほしい」対象のひとを引っ張り出してくることができるということである。このような防災が、最終的にはひろく住民が参加しやすく、また住民のためにもなる防災だ。

さらに、今回のまち歩きは、泉大津市のみではなく、他市・他地域への広がりも見込めそうなものとなった。参加者のうちの何人かは寺院関係の宗教者であったが、そのうち大阪府在住のある住職は、「自分の中でつながった」と言い、今回の活動をヒントとし、自らの寺院においても地域と連携した防災やまちづくりに取り組んでいきたいと語った。実際のところ、今回の泉大津市のまち歩きの翌月には、伊勢市において同様の「まち歩き」が実施された。宗教施設を地域資源とした防災の取り組みが全国的に広がりつつある。

「楽しかった」という声が目立ったまち歩きであったが、課題も見えた。例えば、当日参加していた泉大津市の住民と、共にいた防災士の資格を持つ他市市民との間で交わされた会話を聞いた学生が不満そうにしていた。会話の内容としては、「住民はやる気がない」「市に（住民が）支援しろと言うが、（市の方も）そんなことやってられない」などの内容であった。そのグループの内、半分ほどは学生であったが、学生が先々歩き、会話をしているうちの年配の一人はアプリも使用せず付いてくるといった様子だった。一方で、誰もがスマホを持っているわけでも、アプリを使いこなせるわけでもない。災害時にも協力し合うことが重要だ。

また、当日は参加できなかった宗教者もいた。例えば、泉大津市には、市と既に連携を進めている南大阪聖書教会などのキリスト教会が存在するが、今回は彼らに声はかけられず、参加もしなかった。宗教・宗派を超えて連携

をしていくことには課題が残されている。

今後、市町村による地域防災に加えて、地域住民が取り組む地区防災の動きでも、宗教施設、宗教者との連携の動きは広がっていくだろう。地域住民の要望により、宗教施設が避難所指定されている実態もある。

東日本大震災の被災地で緊急避難所、活動拠点として機能した宗教施設の多くが、日頃から地域社会に開かれた存在だった。祭、年中行事などに加え、宗教者が、平常時から自治体、自治会、社会福祉協議会、ＮＰＯ、ボーイスカウト等と連携しているところは災害時に力を発揮した。今回のような防災まち歩きなども含めて、平常時の取り組みから連携につなげていくことが肝要である。

註

(1) 今回の防災まち歩きは、科学研究費補助金・基盤研究 A「宗教施設を地域資源とした地域防災のアクションリサーチ（研究代表者稲場圭信・大阪大学)」(https://relief-map.jimdo.com/)の一環として、大阪大学、國學院大學、皇學館大学の教員と院生が実施に協力した。

参考文献

渥美公秀 2012「「防災と言わない防災」の二重性」『わが街再発見ワークショップ』http://www.nhk.or.jp/sonae/column/20121116.html（2017/03/20 アクセス）

稲場圭信 2016「宗教施設は避難所になりうるか」, 宗教者災害支援連絡会 (編集), 蓑輪顕量, 稲場圭信, 黒﨑浩行,葛西賢太（責任編集）『災害支援ハンドブック: 宗教者の実践とその協働』春秋社、pp.155-169.

公益財団法人　堺市産業振興センター「南大阪地場産業ポータルサイト」www.sakai-ipc.jp(2017/03/22 アクセス)

ＮＰＯ法人「泉州てらこや」https://www.npo-homepage.go.jp/npoportal/detail/027003262(2017/03/22 アクセス)

てらこやネットワーク http://terakoya-network.com/index.shtml（2017/03/22 アクセス）